

仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑨

鳩摩羅什の来華

訳経史において最も重要な人物の一人が亀茲国出身の鳩摩羅什 (Kumārajīva) である。彼は 401 年から長安に 10 年ほど滞在し、35 部 294 巻の仏典を訳出した。

彼の父はインド出身の鳩摩羅炎 (Kumārayana) で、もとは国相の家系に生まれたが、相位を継がず出家して亀茲に移り住んだ。亀茲国王の敬慕を受け、王の妹であった耆婆 (Jīva) に請われ還俗し結婚した。鳩摩羅什の名は慣例的に羅什と略されるが、サンスクリット語の名は Kumāra と Jīva の複合語であり、それぞれ鳩摩羅と什に音写されたので、それを鳩摩と羅什に区切るのは不自然である。

訳経史における重要な特徴の一つとして、サンスクリット語から漢訳された訳語が定着すると、原文が顧みられなくなり、元の語義が無視された点が挙げられる。語義が欠落し、羅什と略されたのもその典型例であろう。

さて、偉大な翻訳家に大成した鳩摩羅什の生涯を左右したのは、彼の生い立ちと幼少期の教育であったようだ。母の勧めにより彼は 7 歳で出家し、9 歳からは仏教研究の一大拠点であったカシュミールで教理の研鑽に身を置いた。当時、カシュミールは上座部系の説一切有部のアビダルマ学の全盛期であり、彼は精緻な理論を学習し、仏教を否定する外道論者を対論で圧倒するまでの実力を身につけたとされる (横超, 1991:139)。12 歳で亀茲に戻る途中、カシュガルで大乘論師、須利耶蘇摩 (Sūryasoma) に師事し、大乘の新たな仏教に触れた (河野, 2008:22)。この出会いが、彼の仏教観に大きな影響を及ぼした。

説一切有部では、全ての事象・物事を概念的に固定化し、その上で理論を展開するが、大乘においては、現象界の事象・物事はあくまで暫定的なものであり、全ては縁起によって存在し、空であるとする。したがって説一切有部が説くように、全てを固定的に捉えることこそが誤謬であり、悟りへの最大の障害になるとする。カシュミールで説一切有部の教理を習得後、その教えを根底から覆す大乘教理に触れた鳩摩羅什の衝撃は想像を絶するものであったに違いない。若干 12 歳の少年がこのような学問的衝撃と信仰的葛藤を経験したことは非常に大きな意味を持っただろう。この経験は「信」と「知」両面における大きな試練であり、それを超克したからこそ、鳩摩羅什は偉大な功績を残すことができたといえる。

亀茲に戻った鳩摩羅什は、「吾が昔小乗を学べるは、譬えば人の金を識らずして鑛石 (= 純銅) をもって妙と為すが如し」 (横超, 1991:149) といつて大乘に転向し、般若経の研究に没頭したが、その亀茲において数奇な運命が彼を待ち受けていた。383 年、前秦の苻堅は亀茲に軍を派遣し攻略を図った。その結果、亀茲国は滅亡し、鳩摩羅什は捕虜となった。かねてより才大高明な鳩摩羅什の名声を聞き慕っていた苻堅は、將軍呂光に鳩摩羅什を捕え、長安に招致することを命じていた。実はこの苻堅に鳩摩羅什の長安招聘を促していたのは、中国仏教界の領袖、道安であった。道安は中国における大乘宣布を希求し、すでに西域で名を馳せていた鳩摩羅什の来華を切望していた。しかしその苻堅は後秦の姚萇に討たれ、呂光は長安に帰還でき

ず涼州にとどまることになり、鳩摩羅什もそれに従った。その後、涼州は 401 年に姚萇の子である姚興によって攻略された。姚興は鳩摩羅什を国師の礼を以て長安に迎えた。約 20 年にわたる捕虜生活を経て、鳩摩羅什は王朝の庇護のもと、長安にて仏典漢訳に従事することになった。大乘仏教の扇揚者として鳩摩羅什の活躍を切望していた道安は 16 年前にすでに没しており、二人が直接顔を合わせることはなかった。

鳩摩羅什は両親の影響により、幼少期からサンスクリット語に親しみ、仏典をサンスクリット語で学び、さらにはバラモン教の聖典『ヴェーダ』やそれに付随する文法学にも精通していたので、亀茲国出身とはいえサンスクリット語に関しては母語話者同様の感性を備えていた。彼はまた、長きにわたる捕虜生活で西域の各言語や漢語にも慣れ親しんでいた。それに加え、彼は幼少期から英才教育を受け、上座部の教理を習得し、さらには大乘の教理も習熟していた。翻訳に必要な不可欠な語学的素質と専門知識の両面を兼ね備えた碩学が、いよいよ長安で漢訳を先導することになった。鳩摩羅什以前にも、西域からの渡来僧が漢訳に従事していたが、彼らのほとんどは漢語に精通していたわけではなかったため、伝訳に頼ることが多かった。国家事業としての漢訳の訳場では、訳主が原文を読み上げ、それについて講義し、伝訳が漢語へ通訳し、筆受が筆記するなど、役割が分担されていた。さらに訳場には、出家者や在家信徒らが聴衆として参加し、原文に施される講義を聞いていた。時には聴衆が訳主に対して質問し、その応答も行われていたようで、教理伝達の貴重な機会になっていたと考えられる。鳩摩羅什の訳場もそのような多数参加型の公開訳場であり、数百人が集う一種の法会 (仏教儀礼) となっていたという (船山, 2013:56)。

鳩摩羅什は伝訳に頼ることなく、自らサンスクリット語の経典を手にとり、卓越した能力によって経典の内容をそのまま漢語に口述したので、列席した聴衆は鳩摩羅什の声を聞き、インドから伝来した過去のテキストが現実にも生る言葉に蘇生されるような感覚に陥ったのではなからうか。

書き言葉と話し言葉の関係についてデリダは、「声、声音、口調、言述といったものは私にとっては痕跡の諸現象、エクリチュールの諸現象である」と指摘している (デリダ, 豊崎訳, 2016:8)。劇場にも譬えうる鳩摩羅什の訳場は、経典に記されたエクリチュールが、彼を媒体として口述されるパロールによって時空を超越し、リアリティをもって顕現した「聖なる場」となったに違いない。彼が紡ぎだした言葉の一つひとつは、あたかも釈迦が発する「聖なる言葉」のように聴衆の心に響いたのである。

[引用文献]

横超慧日『羅什』大蔵出版、1991 年。

河野訓『中国の仏教受容とその展開』皇学館大学出版部、2008 年。

ジャック・デリダ (豊崎光一訳) 『翻訳そして / あるいはパフォーマンス』法政大学出版局、2016 年。

船山徹『仏典はどう漢訳されたのか』岩波書店、2013 年。